

第37回さきがけ文学賞

応募223編 初の2編入選

第37回さきがけ文学賞の最高賞となる入選は、東日本大震災を経験した少年の成長を描いた北原岳(がく)さん(45)＝本名・柳井貴士(たかし)、名古屋市、大学講師＝の「ヒカリ指す」と、泥棒と少女の交流をテーマにした荒川真人(まひと)さん(65)＝本名・荒川真(まこと)、三重県四日市市＝の「賽銭

(さいせん)泥棒」に決まった。入賞作が2編とも入選となるのは史上初。入選に次ぐ選奨の該当作はなかった。直木賞作家の西木正明さん(仙北市出身)、作家・文芸評論家の高橋千鶴(ちはや)さん(埼玉県出身)、作家の諸田玲子さん(静岡県出身)の3人が、東京・銀座で最終選考に残った5編を審査した。

人のつながり、温かく

大学のゼミで創作を学び、小説を書く周囲から刺激を受けた。教員への道を進み始めてからも、創作への意欲は失わなかった。「教育に携わる人間の視点から、人と人のつながりをテーマにした温かみのある作品を書きたい」と思っていた」と話す。

主人公の少年タケルは東日本大震災で被災して生まれ育った福島を離れ、転校先でいじめを受ける。転機となるのが、故郷を離れ女性として暮らす叔父ヒカリとの交流だ。震災について考えるきっかけになったのが、昨年3月11日の出来事。当時は中国の大

ヒカリ指す 北原 岳さん(45) 名古屋市



受賞の報を喜ぶ北原さん＝愛知淑徳大学長久手キャンパス

学で日本語や日本文化を教え、おとり、夜になって東日本大震災が起きた日だったことに気づいた。中国では関連の報道はなかったが「ニュースがなくても震災のことを思うべきだった」。反省とともに、被災した市井の人たちに目を向けたという思いが生まれ

た。ヒカリの直接的なモデルはいないが、人物造形には、友人や、学生時代に新宿2丁目出会った人々の存在、意識して触れてきた小説や映画、所属する愛知淑徳大学の「ジエンダー・女性学研究所(愛知長久手市)で学んだ知見

なが基礎になった。

物語の軸に据えたのは「逃げる」とだ。「それまでの幸せな暮らしが、自分ではどうしようもないもの力で壊される。そんな時に、現実から逃げ続ける弱さでも、無意味なあつれきを生む戦いでもなく、『敵』と向き合える強さを探すための『逃げ』を背骨にした」と考えた」と強調する。

タケルがヒカリとの出会いをきっかけに新たな道を模索し始める一方、自分の性と葛藤してきたヒカリも前にも変わっていないかもしれない。広い世間は何も変わっていないかもしれない。これから始まる戦いのために、2人が強くなってくれたらいいと思った。タケルを後押しすることで、ヒカリも一歩前に進めるような関係性を描きたかった」

タケルは、ヒカリとヒカリの同居人タカヤと暮らす中、「家族」についても考える。「これからも、さまざま家族の在り方をテーマにした。温かみのある作品を書いていきたい」と力を込めた。

(岡田郁美)

2020年11月3日(火) 秋田魁新聞 朝刊 10面
この記事は秋田魁新報社の承諾を得て転載しています。